

第三回教化化学研究集会発表要旨

カウンセリング（電話相談）

清瀬 常童

（京都・最然寺住職）

戦後三十数年、物質面での繁栄の影に、精神面の遅れが叫ばれています。

精神文化の中心であるはずの宗教が、はたしてどれだけの役割を演じてきたと言えるでしょうか。

現実には、既成仏教は葬式仏教と非難され、新興宗教は御利益信仰とさげすまれ続けているではありませんか。

こうした批判に 대응するために、私たちは、「現実生活に密着した信仰」を目ざして真剣に考えつづけてきま

した。その結果、大聖人の教えは、本来、私たちの現実生活の中にこそ存在するものであり、それを私どもは、生きざまの上で証明すべきことではないかと思に至りました。そこで、

一、現に熱心に信仰をされている方は、あなたの信仰が、本当に聖人の教えに、かなっているか、どうか。ただ世間の慣習上、おつきあいの信仰をされている方は、あなたの信仰が、あなたの人生の本当のさ・さ・えになっっているのか、どうか。

一、「信仰とか宗教とか、自分には関係ない」とお考えの方は、宗教に代わる何らかの人生のさ・さ・えを本当にお持ちなのか、どうか。

一、宗教上のしきたりや作法など、宗教に関したこと全般について。

以上の事項について、「電話」を通じて、又、会合によって、又は手紙等によって、皆さまと一緒に考え、学んでいきたいと存じます。

どうか、私どもをきびしく批判して頂きたいと思いません。私どもは時間の許すかぎり、どちらへも出かけてまいります。

これが「宗教一〇番」のパンフレットの全文である。そしてこの活動は、過去数年、毎週行われてきた、同信の人たちとの勉強会の一つの試みでもあった。「いきな信仰」こそ私たちの命題である。

そうした時、たまたま九州から友人の吉田弘信上人（現、金沢全性寺住職）が京都にいられてから、活動が具体的にになった。

さまざまな準備を経て、この活動は「パンフ配り」から始められた。京都を朝五時前出発（吉田師は四時頃滋賀県志賀町の道場を出発）、車で約一時間。大阪駅前から通勤客にパンフを手ずから渡した。寺務の許すかぎり、パン

フ配布は続けられた。京阪沿線、大阪から京都、近鉄沿線、桃山から京都にいたる各駅の前で配布した。

そして時間の許す時は、その沿線の近くを托鉢しながら配布を続けた。

反応は少しずつ出て来た。電話は勿論のこと、手紙、面接もはじまった。しかし最初は微々たるものであったが、やがて、読売新聞の記者の来寺、取材、そして掲載に至って、そのピークに達した。新聞に掲載されるやいなや、まだ当方が読まないうちに、電話が鳴った。その電話は、昼夜かまわず鳴りつづけた。パンフの配布も休まねばならないほどであった。

その電話の内容は、男女・夫婦・親子・嫁姑等人間関係に関した問題、教育問題、セックスに関したこと（浮気、近親相かん等）、病気に関したこと（看病、うつ病とその家族のあり方等）等々、いずれも、切実、深刻なものが多い。

いわゆる檀信徒相手の場合とは、全く違う。現在、宗教に、信仰に、本当にニーズを感じている人、求めている

る人達は、この人達ではなかったかとさえ思われる。

それに引きかえ、檀信徒の方々の宗教に求めるもの、なんとま・ま・め・る・い・こ・と・か、これが最初に感じたところであつた。

しかし、相談の大部分は、いわゆる悩みごと相談であり、また「いのちの電話」的なものであつた。

ボランティアで行われている、いのちの電話相談などと、この宗教一〇番の違う点は、

一、前者は、カウンセラーが多数、電話番号は明かさ
れているが、住所・氏名は明かされていない。

一、従つて、相談者は同一人のカウンセラーに相談出
来るとは限らない。

一方、一〇番の方は、住所・氏名の明示は勿論のこと、相談を受ける方も同一人である。深刻、かつ複雑な相談に対して、回答の責任の重さを痛感させられた。

ここでは相談の中から、特に宗教・信仰に関する例を、
二、三引用したい。

次の方は、読売新聞の記事を見られ、早速お便りをい

ただいた、妻子を亡くされた方からのものです。

菩提寺へお参りするのが心の安らぎになると思いましたが、ここもまた世間並みというか、死者を事務的に処理していられるだけのようです。この間も庫裡でお茶を頂き、いろいろお話を承りましたが、「人の死」をもっと厳肅なものとして扱つて頂きたいと思ひました。

その時、住職の妻女が「あんたも因果なこっちゃなア。因縁の悪いこっちゃ」といわれました。因果とは何か、因縁とは何か、そのことについては何も教えでは下さらず、因縁を切らないと、この上またどんな不幸に見舞われるかもしれないという不安を抱いて帰つた次第でございます。前世に犯した罪が因果となつて不幸を招くのだといいますが、もう一つ納得できないのです。(中略)とにかく僧侶は布教を専業に、もつともつと大衆に働きかけ、大衆を引きつける努力をしてほしいものです。(後略)

これはまさに現代僧侶・寺院批判といったものでした。

便箋十枚ほどにしたためられた人の世の悲しき、それに對してあまりにも鈍感にしか対処出来ない僧侶達への怒り、そして仏教思想・仏教用語の不用意な、安易な、そして本来の意味とはちがった用いられ方への疑問でした。私は、私なりに、因果の、因縁の、そして業についての考えを、基本的にお答えをしました。また次のようにも述べておられます。

先祖さまに感謝して、朝夕ねんごろにお祈りすること。生きていることのありがたさを思つて仲よく仕事に励むこと、お坊さんはそういつて説教してくれます。しかし不治の病氣と知りながら、えげつない苦しみに耐え乍ら死を待つ病人に、何といつて納得させたらよいのか。介抱する家族にとつても、先祖がどうの、因縁はどうのといわれても、間に合いません。反感さえ抱くのです。……

これは、今日注目をあびています、ガン告知に関連して、宗教者はどう対応すべきかという問題も含んでいます。そして、信仰と病氣、死と信仰などについて述べ、

日頃からの信仰の重要性を書いて、返事としました。

またもう一つの例は、浄土真宗のあるお寺の役員をされた方で、お便り十数回、お電話数回、そしてこれまで三度来寺された方のものです。この方は、中日新聞と東京新聞に掲載された私の原稿「宗教一〇番」を見て連絡して来られたのである。

役員をされているお寺の住職への不信と、信仰についての疑問である。

浄土真宗では、一心に念仏を唱えて感謝の日暮しをすれば、往生の時、如来のお迎えがあると教えています。この点についてもよく理解出来ません。……

これは二度目に来寺される前に提出された問題でありました。これについては、改めて、浄土真宗のこと、日蓮宗のこと、そして日蓮大聖人の教えられている臨終のこと、信仰のことなど約八時間ほど話し合いました。そしてその帰りに、当山で発行されている『御書要文集』（日蓮大聖人の御書の要文を、三百六十五日分にわけ、一ヶ月ごとの分冊にしたもの）を差し上げました。日々読むこと

を誓われました。相談者は、私が話をしている間、ひとつひとつ、ノートにメモされるほどの熱心さでした。

そして、三週間ほどして、『最蓮房御返事』にかかれていた「成仏の理をば時時刻刻にあじわふ」の意味を尋ねられてきました。すばらしい質問です。精一杯の答えを送りました。『御書要文集』の一日分の解説と、そこから教えられたことを書いて教箋としたものを送ったりしております。

二つの例を特にあげましたが、勿論大部分は通俗的な悩みごと、儀礼的なことなど。これらは、私たちが一番望んでいたことがらであつたからです。宗教一〇番という形は大変通俗的ではありますが、実はそれを通して、日蓮大聖人の正しい信仰ということについて共に考えて行きたい、そしてわずかでもいい、日蓮大聖人の教えをお伝えすることが出来たらという願いがありました。

最後に、今、私たちがかかえている課題はパンフ配布をどのようにしていけばいいか。私たちには、人的、時間的余裕がほとんどありません。

さらに、問い合わせに対して、アフターケアにも余裕がありません。中途半端で終わっていることが大変心残りであります。

この「宗教一〇番」は、私たちがはじめたものではありませんが、宗門的に、また各寺院においてすぐに取り組める課題であると思います。

(資料)

カウンセリング (電話相談)

1 企画

a 資料収集

b パンフ作製

- ① 僧侶・信者への不信と批判そして期待に依って
- ② 宗教に関したこと全般

c 専門電話設置

京都 (〇七五) 六九一—五九一九 最然寺

滋賀（〇七七五）九二―一〇三三 最然寺志賀道場

d 相談日 月・金曜日（夜）六時〜九時

e パンプ配布方法 時間・場所など警察と交渉回数

2 実践

a 時 昭和五十四年二月十六日午前六時三〇分

b 場所 阪神沿線 梅田〜京都まで

近鉄沿線 京都〜桃山

c パンプ配布

d 托鉢配布

e 面談

3 反 応

a 電話

b 手紙

c 面接

d 読売新聞・中日新聞（原稿依頼）・東京新聞・週刊

読売・日蓮宗新聞・月刊住職 他多数

e 近畿放送（京都放送）電話出演・NHKからの問

合せ数回

f 地域 近畿・東海・関東・山陰・中国・四国・九

州

g 内容 男女・嫁姑・親子・セックス・病気・宗教

儀式・信仰 etc

4 反 省

a パンプの内容

b 配布・場所方法について

c アフターケア

d 信仰に結びつかない（一回きり・悩みごと相談 etc）

5 提 案

a 各寺の教箋パンプに「宗教一〇番」掲載

b 住職以外の若手青年僧の活動に組み入れ（パンプ

配布・相談など）

昭和五十九年三月二十八日

京都最然寺 清瀬常童 記